

目次

開会趣旨・日程	3
開会式	
開会あいさつ 内山節 実行委員長	4
20回目を迎えた「集い」の歴史とこれから 鹿住貴之 副実行委員長	6
全体会	
講演 西村佳哲 「私たちはどこにいるのかー街から森へー」	9
トークショー 「街から森をめざす若者、登場！」	15
分科会 発表者・コーディネーター・概要報告・若者レポーター報告	
第1分科会 【生きる】元気に山で暮らす	32
第2分科会 【遊ぶ】森を遊びつくそう	38
第3分科会 【学ぶ】先人の知恵に学ぼう	43
第4分科会 【デザイン】森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解く	49
第5分科会 【エネルギー】木質バイオマスの可能性をさぐる	56
全体会	
「2015 森林と市民を結ぶ全国の集い in 福島」の報告 フクシマ環境未来基地 本宮滉也	62
資料	
「森林と市民を結ぶ全国の集い」20年の歴史	66
参加者アンケート	67
「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」実行委員 スタッフ名簿	79

開催趣旨

温故知森 ～森と私たちを結ぶ新たな道～

森林ボランティア団体の情報交換などを目的にして、1996年に第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」を東京で開催しました。その後、1年に1回各地で開催し、2016年東京開催が第20回となります。

この20年、私たちを取り巻く環境は大きく変化しました。そして、森林も、森林と私たちの関係も変化してきました。

この20年、都市集中はさらにすすみ、各地で過疎化や高齢化が問題になっています。人びとの自然環境への関心や森林への期待は高まってきましたが、森林をめぐる状況は厳しいままにあります。

その一方、生活のなかに森や木を取り入れ、さらには農山村地域での生活を志向する都市住民が多くなっています。新たな価値観で、森林や木材などを活かしていこうとする動きも各地に現われています。それは、歴史・文化に根ざした精神的な領域での価値の見直しも含まれています。

いま、多くの人が、森林とともにあることの豊かさに気づいています。

「2016 森林と市民を結ぶ全国の集い in 東京」では、さまざまなかたちで森林を活かす取組みに出会えます。そこから、森林への新たな道をひらきましょう。

日 程

6月11日(土)	東京農業大学世田谷キャンパス
13:00～13:40	開会式(横井講堂)
13:40～14:30	講演 西村佳哲
14:40～16:50	トークショー「街から森をめざす若者、登場！」
16:50～17:30	各分科会の紹介
17:50～19:50	交流会(レストラン すずしろ)
6月12日(日)	東京農業大学世田谷キャンパス
10:00～14:00	分科会 ※昼食(12:00～13:00頃・各分科会による)
	第1分科会:生きる(教室番号:511)
	第2分科会:遊ぶ(教室番号:521)
	第3分科会:学ぶ(教室番号:512)
	第4分科会:デザイン(教室番号:513)
	第5分科会:エネルギー(教室番号:522)
14:15～	全体会(横井講堂)
	アルバ演奏 倉品真希子
	「2015森林と市民を結ぶ全国の集い in 福島」報告 フクシマ環境未来基地 本宮滉也
14:45～15:35	各分科会報告(若者レポーター)
15:35～15:45	閉会式

第4分科会【デザイン】 森×デザイン×森

参加者数 24 人

森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解く

森の存在を街の暮らしに活かすユニークで美しいデザインを通して、新たな森への扉を探求します。地域の人たちをつなぎ、街の木を使った暮らしの道具をつくる活動、里山の植物を都市に移植する緑化事業、森の印象を写しとることで「森の存在を再定義するようなアート制作など、どの取組も、森と人との新たな関係をデザインするものです。

湧口 善之 マチモノ〜街の木を活かすものづくりの会代表

建築家で木工。「いまここにあるものでつくる」をテーマに国産材によるものづくりに取り組むなかで、私たちが暮らす街にも多くの木があること、山にもないような大木がたくさんあること、それらの木々が毎日のように伐採され、ゴミとして捨てられていることに気付き、街の伐採木活用の取り組みをはじめ。これまでに約100樹種、30cm径×2mの丸太換算で約200本分の伐採木を回収・木材化し、街の暮らしに還元。小物雑貨から家具・建築まで、木の伐採から製材、製作、植樹まで。木に関わる様々な専門家と協業しながら街の木のあり方を問い直し、暮らしのなかで自ずから生まれてくるデザインを目指して活動している。

宮田 生美 株式会社 ゴバイミドリ代表

1991年から㈱アネックスに所属し、旧住宅都市整備公団(現UR都市機構)のニュータウン開発など公的セクターの街づくりや地域計画のコンサルティング業務に従事。この中で、ランドスケープデザインや環境計画に携わる。コンサルティングだけではなく実際に街に緑を増やすことを企図して、2003年、5×緑(ゴバイミドリ)プロジェクトを立ち上げ。2013年㈱ゴバイミドリ設立。代表取締役就任。「ウーマンオブザイヤー 2010」受賞。

木村 崇人 現代美術作家 地球と遊ぶプロジェクト

1971年生まれ。愛知県出身。東京藝術大学大学院博士課程修了。Ecole Supérieure d'Art et de design de Reims(フランス)卒業。「地球と遊ぶ」をテーマに地球や自然の見えない力を知覚化、視覚化させる作品を制作し、世界に発信している。主な展覧会に「森を遊ぶ・木村崇人展」アサヒアートコラボレーション(2008)、「木村崇人と宮崎で地球と遊ぶ」宮崎県立美術館(2013)、越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、あいちトリエンナーレ。「Light Project V」Kulturhuset Vit Skolan/スウェーデン(2013)、中房総国際芸術祭 アート×ミックス(2014)、Rivers Project Kaohsiung Pier-2 Art Center/台湾(2015)「ここに棲む〜地域社会 へのまなざし」アーツ前橋/群馬(2016)

コーディネーター

落合 俊也 森林・環境建築研究所

1959年 東京都国立市生まれ。1987年早稲田大学大学院理工学研究科修了、同年(株)杉坂建築事務所入所し、木造で実現するエコロジーコンシャスな住宅、バツシブ設計を追求する。2014年春、杉坂建築事務所より独立し、(株)森林・環境建築研究所を創立。森林共生住宅を提唱し、森林環境を住居に写し取る究極の木の家づくりを探求している。受賞:建築・環境省エネルギー住宅賞、サステナブル住宅賞最優秀賞・国土交通大臣賞他。

|| 報告

松下 芳樹

NPO 法人森づくりフォーラム理事

この分科会のねらいは、森の存在を街の暮らしに生かすユニークで美しいデザインを通して、新たな森への扉を探求することと設定されている。

そのための具体的な切り口として用意された事例は、まず、暮らしの中で実際に触れて利用する家具やインテリアの製作を取り上げ、続いて、街の中に小さな里山環境を創造する造園事業に注目し、最後に、私たちの感覚的な世界の中での森の捉え方を提示する現代アートに触れるという、それぞれ違った角度からのアプローチであった。

これらの事例は、それぞれの活動や個人の経歴や背景などの理解を踏まえないと、今回の分科会が提示する「デザインの力」は見えてこないことから、発表時間を長めにとって、そのあとに参加者のグループでの討議により、それぞれの活動の提示するものについて意見交換を行うこととした。

湧口氏の発表は、地域の人たちをつなぎ、街の木を使った暮らしの道具をつくる活動である。建築の仕事をした頃は、スギ・ヒノキの国産材を使った在来軸組みの家づくりの設計・施工をしていたが、その工法だとお金がかかって割高になり、時代にあっていないのではないかと考えていた。その頃、飛騨高山で家具づくりを学ぶ機会を得て、高山に一年間移り住む。そこで広葉樹等を含む様々な樹種について学んだが、東京に帰ってくると、街の中にも多くの樹種と大径木があり、それらが人・街の都合で毎日のように伐採され産業廃棄物として処分されていることを知った。そこで、それら街の木を活用した家具やインテリア、小物などの製作に取り組む。街路樹や緑化木などは、山からの木材にはない多種多様な樹種があり、木材の性質も多様で、これまでの経験知もないことから、実際に材料として利用するには実経験と技術の

積み重ねが必要だったとのことである。そのような木の性質から製作できる作品には限りがあったが、それを踏まえた暮らしの中で使用できるもの、暮らしの中で自ずと生まれてくるデザインを生かして製作するようになった。



また、その木が街で育ってきた歴史と街との関わりの記憶までも、その作品の中に反映しようとすることで、製作された家具や小物は、暮らしの中での単なる道具としての使用価値以上のものを持つことになる。

この活動から、さらに街の木が持つ課題に気づく。街の木を増やそうという意見は多いが、実際に植えられた樹木には維持管理が必要であるし、邪魔になり伐採しようとするとは反対する人も多い。しかも残せという人はその経費を払わない人がほとんどである。そのため、街に木を残そうとしても、そのオーナーにとって木は負債になる可能性が高い。これを負債ではなく資産に出来ないかと考え、伐採した木を使った木工体験や、街にある木の実を使った食体験などのイベントを開催し、住民の意識を変えようと試みている。都市の木をどうやって残していくのか、どうやって暮らしの中に生かしていくのかについてのこれまでにない本格的な活動の報告であった。



次に、宮田氏の発表は、里山の植物を都市に移植して里山環境を再生する緑化事業の活動である。最初は、企業等で街づくりや地域計画のコンサルティング業務に携わっていたが、自宅の玄関スペースの緑化を専門家に委託したことがきっかけで、実際に自然度の高い緑を増やすことの可能性に目覚め、それから発展して、ゴバイミドリ(5×緑)という会社を立ち上げた。実際には、里山地域と連携して、在来の植物を使って都市の緑を増やす仕事をしている。工法的には、人工軽量土壌とカゴ・金網を使った手法により、都市の家は外構が狭く、緑が少なくなりがちであるが、住宅と道との間の狭隘な場所や建物の屋上緑化などでも雑木林のような木々を植えることができる。このような複層の緑を造成すること(5倍=5×)で、里山植生の復元は可能である。里山の植生を復元するのは、都市に里山の景観を再生したいためであり、都市の暮らしに季節を取り戻すことがテーマである。この取組みの中で、在来の植物を調達する必要がある、里山地域との連携が始まった。都市の緑化用に里山の植物を里山地域から調達し、里山地域はそのために里山の植生を管理・再生するという関係である。木材を生産する山側では、これまで、在来の草本・広葉樹は駆除すべきものであって、それらを保全管理するという発想はなく、新たな森林管理を行うことになった。また、湧口氏の話にもあったが、都市の緑には維持管理がつきものであるが、このメンテナンスを手間・コストと考えることをやめて、「丹精を込める相手がいることは豊かなことなんじゃないか」と

いうようにメンテナンスの考え方を考えていこうとしている。その一環で、都市の里山の維持管理については、落ち葉は再利用し、除草は外来種のみとして、その作業はワークショップにして実施するなどメンテナンスをイベントにしている。外来種のみを除草するだけで植生は大きく変わってくるし、緑化木の剪定のやりようによっては、里山景観を維持できる。このように里山の景観を都市の緑で再現することにより、風景は人々の日々の営みの積み重ねでできていること、すなわち、「人が風景をつくるということ」を実践している活動の報告であった。



午後からの木村氏の発表は、午前中の発表とは異なり、経済活動とは距離を置いたものである。今回の発表の中心は、森の印象を写し取ることで「森」の存在を再定義するようなアート製作であった。



本来は、地球の自然の見える力を知覚化、視覚化させる作品づくりを行っており、「地球と遊ぶ」ということをテーマとしている。これまでも、光や重力、風といったものを扱ってきており、1998年からは木洩れ日プロジェクトを行っている。木洩れ日の形は○だが、これは太陽の形（光源）が○だからで、木々の葉の間がピンホールカメラの役目をして地上に木洩れ日が○になって写しだされる。その証拠に部分日食の時の木洩れ日は三日月形の太陽を写して三日月形の木洩れ日だった。これまでに光源を星形やハート型にして木洩れ日を再現するような作品づくりをしている。風を扱った作品としては、瀬戸内芸術祭で女木島の港にカモメの風見鶏を展示している。実際に近くに止まっている鳥と同じ方向を向いているが、元来、鳥は風上を向いて止まる。このようにイメージを伝えるために体験型にしている。「遊び」とは、まず「実験」して、「観察」をして、何かを「発見」するということ。森との直接的な関係は、2008年からアサヒビールの森での取り組みからである。現在は、山梨県の早川町に住んでいるが森が96%を占める町である。森を知ろうとしたが、痛感したのは手に入る情報と実際の森の現場とはズレがあることだ。山を知れば知るほどその抱える問題は重い。何ができるか悩んでしまった。遊ぶところではないという気持ち。そこでとにかく森の表情を表現することにした。作品としては家づくりに合わせて森を表現するか、コンセプトボンサイなど。森はそれを構成する植物たちが光を奪い合いで戦っている。森をいかに楽しむかを考えた時に、まずは森に興味を持ってもらうことではないか。そういう切り口であればアーティストとしてのアプローチの仕方はあると思う。今日は、実際に小さな木洩れ日の再現装置を持ち込んで、参加者がそれぞれに光源の形で変わる木洩れ日を再現してみるという体験型の報告となった。



それぞれの発表の後の意見交換とその紹介では、落合氏がコーディネーターを務めた。まず湧口氏の発表についての意見としては、街の木をうまく使えるようにする仕組みづくりだ。その木の持つ物語をワークショップにどのように生かすのか興味がある。といった発言があった。宮田氏の発表については、コンクリートが多いのは都会だけでなく田舎も多い。最近では身近な緑があっても気づかなくなっているのではないかと。といった意見があった。木村氏の発表については、アートは森を知るための入り口になるのではないかと。アートにすることで、特に体験型にすることは子どもから大人まで興味を拡げることができ、五感で体験することは後まで残るので良い。森は木を切って売ることしかないと思っていたが、それ以外の価値もあるのではないかと認識ができた。といった意見があった。



コーディネーターからは、湧口氏の活動は、木の魅力の先に森がつながっている。一般の人はこれをよく知らない。この関係をうまくつなげている活動だ。宮田氏の活動については、緑化における多様性をうまくバランスよくデザインできている。木村氏の活動については、午前中の2件の発表が経済を考えたうえで発表であるが、アートの話には経済性を考慮しなくてもよいというのが違いではないか。とのコメントがあった。

これについての発表者のコメントとして、湧口氏は、特にゴバイミドリの話聞いて、改めて、緑が邪魔者になっているのを変えていくべきと思った。緑を負債から資産へ変えるために、所有者に負担させるのではなく、その費用の支払先を変えることが重要であり、そのための活動をしたい。経済的に成り立つことは重要なので、ちゃんと経済性がある活動にしていきたい。との話があった。宮田氏からは、特に、コストを含めメンテナンスについては、楽しく解決していくことが大事である。在来植物を里山から調達することで、雑草と思っていたものが、どのように街で使われているのか、その価値が分かって山側の考えが変わってくるのがわかる。街の緑の再生と里山の再生が繋がればいいと思う。自分の仕事の結果で緑が増えればよく、少しでも世の中のためになればよい。ビジネスとして成立しなければ安定しないし、山の生業の一部にもなれない。というコメントがあった。木村氏からは、アートはそもそも誰かが儲かるということから始まらない。人の気持ちをどのように動かせるかということから始めている。自分からは経済にはかかわらないが、活動としてはいつも決められた予算の中でやっている。というコメントがあった。

以上のように、今回用意された発表事例は、単なる木工クラフト、造園業、アーティストの活動紹介というものではなく、それぞれに「森」というものが持つ多様性の中から、これまでになかった視点で、その多様性の一部を切り取り、これまでになかった価値観をもって、私たちの暮らしの中の一場面として再現している

事例である。このとき、「デザイン」は単なる視覚的なもの、感覚的なものを越えたものを提供する。それは、湧口・宮田両氏の事例では、価値創造として、木や植生に新たな「使用価値」をもたらしているが、さらに、使った木や再現した里山が物語を持つことで、その使用価値をも越えたものになりうる。しかし、そこには必ず現実の経済的な業として成り立っているかどうかが付随してくる。一方、木村氏の事例は、最初から経済性を意識していないものであり、生活者の意識の面での新たな価値の発見につながるものである。それは、直接的には経済性を伴うものではないが、その影響を受けた価値観が生活の中での価値の選択、それを具現化した商品や暮らしの選択を通じて現実の経済社会につながると言える。これらの事例が提示する新たな発想は、制約のある中でのものであったり、制約のない自由な発想によるものであったりするのだが、そこにはそれぞれに新しい価値の発見があり、それが森と人との関係についてのものであることから、それは森と人との新たな関係性をデザインするものであり、まさしく、森の「抗えない魅力」の謎をデザインで解くことといえるのではないだろうか。

最後に、このような新たな価値創造の取り組みが拡がり、私たちの暮らしの中で森や木をうまく生かしていく経験が、社会全体でいかに森をガバナンスするかという命題につながることを期待したい。



1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。

1. 山の中だけが林業じゃない
2. 林業とアートは合わせることができる
3. 風景は人々の日々の営みの積み重ねでできている

2 参加者 印象に残った発言を簡略に記入してください。

1. 活動はしっかりとお金になっているのか
2. 川上の活動がここまで広い分野でされていて勇気出た
3. 生産者としてできることは何か

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

1. 林業と他のジャンルの組み合わせはまだたくさんある
2. どのように付加価値を付けて木を販売するのか
3. 林業の知識だけでなく幅広く知ることの大切さ

1 発表者・コーディネーター 印象に残った発言・報告を簡略に記入してください。**1. 湧口さん**

街にある広葉樹は樹齢が高く大きな木でさえも容赦なく伐採され、切られた樹木は廃棄物として捨てられる。こういった樹木を使って「自分で製材」「樹皮で染色」「どんぐりや実を食に活かす」といった様々なワークショップを開催している。さらにこういった街の木から椅子やカトラリーといったものも制作している。製材は広葉樹を取り扱う製材所が少ない、置くコストが高い、人工乾燥の設備がないといった理由から岐阜や青梅の製材所で行っている。

街の樹木は種類が豊富なおえに虫食いや腐れ、曲がりといった欠点や癖が強い。そのためデザインを決めてから制作するのではなく、ある素材をどのように生かして制作するかが鍵である。そうして思い入れのある樹木を形に残してやることで、樹木を人の負担ではなく資産にして循環させるシステムをデザインしていくことを目指す。

2. 宮田さん

暮らしに季節を取り戻すことを目的に、「里山と提携して日本の在来植物で都市に緑を」をコンセプトにして庭園や建築の緑化「5×緑」を行っている。金網のカゴに土壌と植物を植えそれを設置していくため、土壌の交換がいらないうえ既に施工がすんだ庭園や新たに植物を足したい場所にも設置ができる。また、どんぐりキューブという小さな鉢植えを製作するワークショップや5×緑の学校という形で、子供たちや高校生が自然と触れ合う機会を提供している。

風景を作るツールの提供によって、人々に町の風景を作るのは自分なんだということを知りパブリックマインドを得て欲しい。メンテナンスが手間という考えではなく丹精を込めることは豊かだということを知ってほしい。5×緑はその思いで「人が風景を作るという事」をテーマに2016年は活動していく。

3. 木村さん

「地球と遊ぶ」をテーマに作品を制作している。森林はあまりに大きくまた、深い問題を抱えているため遊ぶことなんてできないと最初は思ったが、実際に森に入っていくうちに木漏れ日や使われなくなった山小屋を使って作品を制作するようになった。森の中に落ちているものは、時間の経過が凝縮されているものでありそれも芸術の一つになる。

3 感想 参加して感じたことを箇条書きで記入してください。あなた自身を含めて若い世代が、これから森と関わっていくうえで参考になった点、また提案などありましたら記入してください。

身近にある木や植物が、森林に通じていることが森林の価値を見直す第一歩となることがわかりました。緑に癒されたい人、環境の保全に貢献したい人、コンセプトアートに興味がある人、木工品が好きな人、自然食品が食べたい人、といった様々な興味を持つ人達の目を森林に向けさせる多彩なデザインのシステムが森林の抱える沢山の問題解決の新しい鍵になり得ると思います。

ただこのプロジェクトの意図が参加者に伝わっているかが分かりづらく、ただ「面白かった」で終わってしまう可能性があるため、いかに興味を持ってくれた人をつなぎ留めるかがこれら三つのプロジェクトに共通するこれからの課題であると考えました。